

女ひとと男ひとのナムアマミダブツ

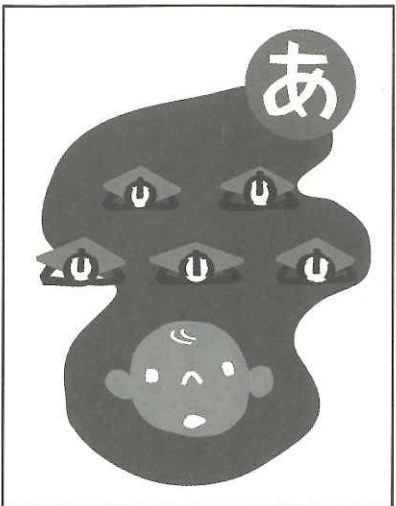
はじめに

本書は、二〇一三（平成二十五）年十二月より、二〇一八（平成三十）年九月まで、飛騨一円のご家庭に毎月届けられる真宗の機関紙『ひだご坊』の「家族で語ろう」というコーナーで連載された文章をまとめたものです。

『女と男のナムアミダブツ』を手に取ってくださった有縁の皆さまへ。本書から感じた「問い」や「課題」を、大切な「ひと」と共有し、語り合ってみてください。

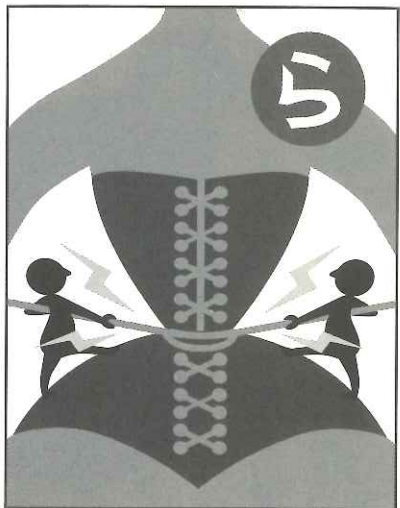
- 女と男のナムアマダブツ 4
- らしさという イメージに しばられて 6
- 寝たふりを している亭主に 灸をすえ 12
- 「まだ一人？」 ほっといてくれ 生き方だ！ 17
- 世襲制 寺は一体 誰のもの 22
- やめました 良妻賢母と 縁の下 27
- 母不在 父と子どもは 骨休め 32
- ちよつと待って 私の予定は 聞かないの？ 38
- 会長は 男の人に 押し付けて 43
- 「女の子」。いくつになっても 半人前？ 48
- 虫にがて そんな男が いてもいい 54
- 乗りこえよう 制度、因襲、世間体 60
- おむつ替え だんだん父に なっていく 66
- 絵に描いた 餅にさせない 男女共同参画 72
- 産まれないのは 女のせいと 決めつけて 78
- 変だなど 思いながらも おごられる 84
- 見えないね 歴史の中の 女たち 90
- 酒の席 セクハラおやじに 変身す 96
- 献立は 誰の好みで 決めてるの 102
- 「いたずら」と ごまかさないうで 性犯罪 108
- 「誰もおらんのか！」 あんたに 私かなぜ見えん！ 114
- 理屈言う 口があったら まず動け 120
- 踏まれたら その時痛いと 言いたいね 126
- ジェンダーの 問題みんな 考えよう 132
- 珍しい 生き物ですか もの言う女性 138

女と男のナムアマミダブツ



あ
跡継ぎは
まず長男と
思わされ

真宗大谷派（東本願寺）の中に、「女性室」と書かれた部屋があるのをご存知でしょうか。「男女両性で形づくる教団」を願いとして、一九九六年に設置されました。男女のいのちの重さは同じだと理屈ではわかっていますが、これまでの男性中心の組織や、女性はひかえめな方が良いという意識はなかなかぬぐいさることはできません。そこで、どうしたら男女の問題を「自分のこと」として考えることが出来るだろうか、と思った時に、五七五調のカルタにしようということになりました。毎年開かれる「女性会議」の分科会の参加者で作ってみたところ、とても反響があり、その後、全国から約二百もの句が女性室に届けられました。その中から、五十句を選び、カルタを作りました。また、多くの方に知っていたために、無料冊子も作りました。女性と男性は本当の意味で出あっているのでしょうか。日常の何気ない出来事や会話をもとに考えていきたいと思っています。



ら
らしさという
イメージに
しばられて

外科医は誰？

いきなりですが、なぞなぞです。ある日、男の子が交通事故にあいました。救急病院に運ばれてみると、担当の外科医はびっくりしてしまいました。自分の息子だったからです。ところが、男の子の父親は外科医ではありません。一体これはどういうことでしょうか？

答えは簡単ですが、常識にとらわれているとなかなかわかりません。

ランドセルの色

先日、ある女性と話をしていたら、「四月から男の孫が小学校に入学するので、ランドセルを買ってあげようと思っただけだけど、色のことでちょっともめているんです。というのは、孫は赤のランドセルを買って欲しいと言っているのですが、親としては赤ではちょっと変だと言うのです。私は孫の希望

をかなえてあげたいと思う一方で、親の気持ちもわかるのでどうしたものか」と悩んでいるのでした。この女性やご両親は何にひっかかっているのでしょうか。おそらく男の子が赤のランドセルを背負っていったら、奇異な目で見られて学校で冷やかされたりいじめられるのではないかと心配しているのだと思います。個性が大切、個性を育てようなどと言われますが、個性的という言葉が誉め言葉ではなく皮肉だったりするのが現実です。

「らしさ」の縛り

今回のカルタの句は「らしさという イメージに しばられて」です。絵では女性のウエストがぎゅうぎゅうに絞められています。こんなに細くされたら、苦しいに違いありません。それでも無理して細く見られるようにするのはなぜでしょうか。縛っているのは誰でしょうか。自分ででしょうか、それとも他人で

でしょうか。子どもが育っていく時に「女らしら・男らしさ」という意識が初めて形成されるのは家庭だと言われています。赤のランドセルを欲しいと言っている男の子は、私たち大人世代がすでに身に付けている「らしさ」の縛りから自由な世界に生きているのだと思います。

常識と偏見

さて、冒頭のなぞなぞの答えはわかったでしょうか。答えは「男の子の母親が外科医」なのです。答えを知ってしまえば、なるほどそういうことかと思うのですが、私は初めてこのなぞなぞを聞いた時、答えがわかりませんでした。わからないにはわからない理由があります。それは私達が外科医と言えば男性を連想してしまうからです。いつの間にか外科医＝男性という常識が私たちの頭に来上がってはいないでしょうか。アインシュタインは「常識とは人が

十八歳までに積み上げてきた偏見である」と言っています。変人と言われたアインシュタインならではの言葉です。偏ったものの見方がものごとを素直に考える邪魔をしてしまいます。私たちは文化的・社会的につくられた「女らしさ・男らしさ」という常識がいつの間にか刷り込まれてしまっているのです。それをジェンダーと言います。

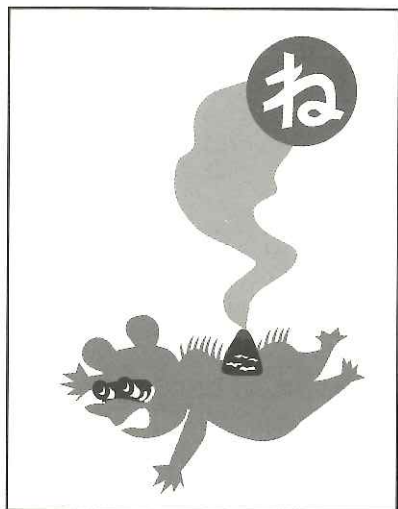
性の違いによって、「男ならば〇〇するのが当たり前」「女は〇〇でなければならぬ」というように枠にはめ、さらに価値付けがされると性差別になります。例えば、男性の外科医なら有能だろうけれど、女性の外科医はそれ程でもないといった具合です。「勉強が嫌いでも男だから大学くらいは行っておけ」「女なんだから短大でいい。ましてや大学院なんて行ったら嫁のもらい手なくなる」というようなことを言われたこと、言ったことはないでしょうか。これらのことは本人を思っていることで悪気はないのかもしれませんが、でも、

「らしさ」が「こうあるべき」という考え方、つまり正しさに立った時、そうでない人に対して「〇〇のくせに」という批判に変わってしまうのです。「らしさ」ということを言われると不自由だ、縛られていると感じる人と、感じない人がいるので、ややこしい問題です。あなたはどうか感じているでしょうか。

(二〇一四年二月掲載)

十年目のプロポーズ

ある日の座談会でのこと、一人の男性が結婚十年目の元旦にあらためて妻にプロポーズをしたことを話してくれました。「へえ、照れずにそんなことをする人もいるんだ。さぞ奥さんは嬉しかっただろうな」と思いながら、話の続きを聞きました。すると妻からの返事は、「あなたとの結婚は失敗でした。あなたは私を便利屋のように使っていますね」というものだったという。彼は相当ショックを受けたそうだ。思い返してみれば、妻は結婚生活での苦しい胸の内を時々話してくれていた。しかし、そのうちに「また、グチか」と思うようになり、真剣に妻の声を聞いてこなかった。その場限りでお茶を濁してやり過ごしてきた。日々の雑事である家事を「女の仕事」として、自分は何にもやってこなかった。自分は両親の後姿を見て育った。家事の全ては母がやり、父は家の中のことは何もしなかった。「便利屋のように」という妻の言葉が胸に響い



ね
寝たふりを
している亭主に
灸きゆうをすえ

た男性は、それからはよく「ありがとう」と声をかけるようになったという。でも、妻はこう応える。「いくら、ありがとうと言ってもだめですよ。あなたの根性はわかっていますから」。そう、自分にとつて都合の良いことをしてくれたから「ありがとう」なのだ。それを妻には見破られている。

今回のカルタの句は「寝たふりを している亭主に 灸をすえ」です。絵には聞く耳をもたず、狸寝入りをしている夫が描かれています。一緒に暮らしていてもお互いに心が通じ合うのはとても難しいことだと思います。いえ、一緒に暮らしているからこそ、わかったつもりになっているのかもしれない。

『生命は』

そんなことを考えていた時に、詩人、吉野弘よしのひろしさんの計報けいほうを知りました。久しぶりに詩集を広げて、『生命は』を読んでみる。「生命は 自分自身だけでは

完結できないように つくられているらしい」で始まり、花が実を結ぶためには昆虫や風の助けが必要なことが描かれ、「生命はすべて そのなかに欠如けつじょを抱き それを他者から満たしてもらうのだ（中略）私も あるとき 誰かのための虻あぶだったろう あなたも あるとき 私のための風だったかもしれない」で終わる。昆虫がチョウではなくてアブというところが面白い。チョウならきブンいつて時には人を刺し厄介者やくかい扱いあつかされる。でもアブのように時にはうとましく、わずらわしい他者によって初めて、私が私と出あい、私になっていくのだということを詩人は伝えたいのではないかと思います。

ひとつひとつ

座談会の終わりに、その男性は「これまでは妻としてだけ見ていて、一人の